

## スロベニア略史

人見 敦

## 「スロベニアとは」

スロベニアはバルカン半島の付け根、アルプス東部の麓に位置する小国で、国土の大半が山岳と森林に覆われています。風土はアルプス地方に似ていて、スイスやオーストリアそっくりの田園風景が特徴です。スロベニア人は民族的にはスラブ系ですが、勤勉でその生活形態はオーストリア、イタリア、スイスのアルプス民族とその性向はアルプス民族に似通っているとのことです。ハプスブルク帝国の長い支配を受け、ドイツ文化の影響を強く残して来ました。25年ほど前に民族紛争で騒乱の旧ユーゴスラビアから分離独立し、現在の人口は約200万人です。オーストリア、ハンガリー、クロアチア、イタリアと国境を接しており、経済的にはユーロ圏に属しています。→ レジメ付図1 地図①参照

## 「スロベニア独立への道」

レジメ付図3 3-1 第二次大戦後のユーゴスラビア、3-2 スラブ民族の大移動、3-3 中世のセルビア王国

スロベニアを語るには民族の発祥地点から歴史を辿るよりも、今回の場合、時間軸を現代より少し前から始めた方がいいかと思いました。

スロベニアはハプスブルク帝国時代から両大戦を潜り抜け、多民族国家ユーゴスラビアの中で経済的に先進地域を築いて来ました。ユーゴスラビアの崩壊は、1980年代に始まります。1980年5月に第二次大戦下のナチス抵抗戦から戦後までユーゴを導いてきたチトーが死去。第二次石油危機でユーゴ経済は打撃を受け、貿易収支は年々赤字を続けました。この危機に対応できるチトーのようなカリスマ性のある有力な後継者がいませんでした。第二次大戦下での民族を超えたパルチ

ザン思想も風化し、意識下に眠り続けた民族対立が再び蘇ってきます。そこにはユーゴスラビアの建国以来南北の経済格差が存在しました。スロベニア、クロアチアの経済先進地域で稼ぐ外貨はマケドニア、ボスニア・ヘルツゴビナの南部の最貧地域に消えて行きました。スロベニア、クロアチアにとっては己の地域に還元されず不満を持っていました。二国は第一次大戦以前までハプスブルク帝国に属し、西ヨーロッパ経済圏で、産業構造も進んでおり、他の農業・畜産に頼った経済とは異なっていました。経済先進共和国のスロベニア、クロアチアとセルビア連邦政府との対立へと進みます。

1987年を境に経済悪化は加速度的に進み、インフレは年率100%を超え、郵便料金は連日のように改定されます。1874年にはポスト・チトーに備え、ユーゴ連邦内の各共和国、自治州に大幅な権限委譲がなされ、経済主権も認めた画期的な憲法が公布されており、セルビア人主導の連邦政府はこの「74年憲法」に縛られているとし、憲法の改定を狙っていました。連邦の権限を再び強化しようとするセルビアと経済主権を守りたいスロベニア、クロアチアは対立していきます。（大セルビア主義を奉じるセルビア人にとって20世紀初頭よりバルカンにおいて領土を拡大してきた南スラブの盟主は我々だという自尊心がありました）

このような状況下の1988年に「74年憲法」の改正が強行され、この改定に端を発するコソヴォ紛争は、多民族国家ユーゴスラビアに民族紛争の再燃を予感させるものでした。

スロベニア、クロアチアは「連邦」に代わる主権国家間の共同体構築構想を提案するが、セルビアはセルビア人主導の「連邦」に固執し、民族抗争は現実化し、各地でセルビア人

とクロアチア人の衝突が起きます。ユーゴスラビアの経済は破綻寸前の様相で、通貨の下落は止まりませんでした。

セルビアで高まった民族主義はスロベニアに危機意識を生みました。「74年憲法」で保障された経済主権が揺らぐ危険があり、集権的な連邦に変わればスロベニア経済は犠牲を強いられます。セルビア主導の中央集権国家に戻れば、事実上戦前のセルビア人支配体制の再現です。スロベニアはクロアチアと共に連邦よりの離脱へ向かいました。

1991年6月25日、スロベニアは独立宣言。二日後に異を唱える、連邦軍が侵攻し、スロベニア防衛との戦闘が始まるが、10日後には和平が成立。「10日間戦争」の短期間で独立を達成できました。それは紛争が長引いたクロアチアと異なり、共和国の民族構成がスロベニア人に対しセルビア人の比率が3%以下で国内の内紛が起りませんでした。スロベニアは民族の悲願独立を果たしたのです。(実は歴史上スロベニアは独立したことはなかったのです) ユーゴスラビアではこのあと数年にわたって民族紛争が吹き荒れます。(参照レジメ付表1の図1-2)

### 「ハプスブルク帝国臣民スロベニア」

1278-1791年

スロベニアは冒頭に申し上げたように、ゲルマン民族による長い統治下にありました。ハプスブルク帝国はその領域にチェコ、スロバキア、ハンガリー、オーストリア、スロベニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、ルーマニア西部、ポーランド南部、ウクライナ西部、イタリアの一部を含み、中欧で最大帝国でした。主な言語だけで11種に上る多民族国家でもありました。またスロベニア人は帝国領内のオーストリア地域で6つの州に分散して居住していました。

ハプスブルク帝国は異民族に比較的緩やかな統治でしたが、スロベニア人は強力なゲルマン民族の下でドイツ化の脅威にはさらされており、民族のアイデンティティ(民族意識の

抛りどころ)は民族言語でした。(16世紀の宗教改革の時期にスロベニア人の多く住むクライン州ではカトリック司祭、詩人などが中心になりスロベニアの歴史・言語の研究がなされ、言語の体系化が進み、普及の努力でスロベニア語の存続は確保されてきました)。(100万人の少数民族が民族として存在できたのには民族言語の維持にあったといえると思います)。

しかし、帝国での公用言語はドイツ語であり、スロベニア語は二級市民、農民の使う言葉として許されているもの、官庁で使われる公文書、地名表示などは凡てドイツ語でした。スロベニア人にとって目標は帝国の統治の下で民族を同一行政地域に統合すること、民族言語をドイツ語に並んで公用語にすることでした。

(参照地図)レジメ付表3 スラブ民族の大移動 3-2

### 「ナポレオン戦争期のスロベニア」

1809-1913年

18世紀末から19世紀の初めにかけてはナポレオンが台頭しドイツ諸州、ベネチア共和国、神聖ローマ帝国(ハプスブルク帝国)を撃破し、フランスがヨーロッパに覇権を確立した時代です。1809-13年、スロベニア人が多く居住するクライン、ケルンテンはイストリア、ダルマチアとともに古代ローマの地域名で「イリュリア諸州」としてフランスに併合され、イタリアとバルカンを結ぶ交通の要所の故、ライバッハ(スロベニア語名リュブリャナ)が首都とされました。(長い間、忘れられていたイリュリアという名前はナポレオンによって復活した)短い期間でしたが一つの地域単位で民族を結集でき、スロベニア語がドイツ語、イタリア語と並んで公用語となり、スロベニア人に連帯感を持たせる記憶となりました。

しかし、ロシア戦役にスロベニア人の若者が動員され、その多くが戦死、また軍事費の支出などの重税が課せられた。レジメ付図2 イリュリア諸州

## 「オーストリア・ハンガリー二重帝国へ」

1867-1918年

ナポレオン戦役後 1815年、帝国は領土を回復し、経済が豊かなロンバルディア、ベネチアを得ました。1815年にはヨーロッパ世界では国際秩序をフランス革命以前の状況への復帰と維持を目指すウィーン体制を構築し、大国の利益が優先されます。しかし、自由主義（リベラリズム）と民族主義（ナショナリズム）という二つの理念によって帝国は揺さぶられていきます。多民族国家オーストリアにとって民族主義の理念は国家の衰退に繋がります。各地で起こる反ウィーン体制の動きをオーストリア宰相メッテルニヒは弾圧していきます。

1848年革命はヨーロッパ中に波及し、ウィーンにも暴動が起き混乱の中ハプスブルク家の最後の皇帝となる若き皇帝フランツ・ヨーゼフ1世が即位しましたが、帝国はもはや衰退傾向にありました。1953年ロシア帝国がオスマントルコと戦端を開いた、オーストリア帝国はバルカン半島にロシアが影響力を及ぼすのを嫌い、オスマントルコを支持しました。それでウィーン体制以来友好を保っていたロシアと関係が悪化しました。それは神聖同盟の崩壊を意味し、ロシアの後押しを失いオーストリアはドイツ連邦内における地位を低下させてしまいます。

イタリア統一戦争で 1859年ロンバルディアを失い、プロイセンの挑発に乗って普墺戦争で敗北し 1866年ベネチアも失い、オーストリアを盟主とするドイツ連邦は消滅、帝国は威信を減じていました。

今まで述べたように、オーストリア帝国は、数多くの民族を抱える多民族国家ですが、支配階級はドイツ人であり、特権的地位を有していました。しかし、帝国内の総人口の24%にすぎず、諸民族に比し少数派でした。衰退に向う帝国を存続させるには帝国内に住む諸民族との平等な関係にもとづく連邦国家とすることはドイツ人主導のハプスブルク帝国は取れるはずありません。

1866年普墺戦争でプロイセンに敗北し、ド

イツ連邦を弾き出されたオーストリア帝国は多民族国家として、中欧の大国として諸民族を率いていくよりありませんでした。それで帝国内では人口が20%のハンガリー人と組み、自治を認めオーストリアとハンガリーの二つの政府がそれぞれ統治する形態の連合国家を成立させました。これがオーストリア・ハンガリー二重帝国で両方の君主にフランツ・ヨーゼフを戴く同君の連合政府でした。軍事・外交および財政は共有していました。

その他の民族の自治獲得の動きも鎮静化せず、激化していましたが、どの民族も帝国からの独立を望んでいたわけではありませんでした。ドイツとロシアという大国に挟まれたこの地域で、小国が生き残れないことを自覚していたためです。独立ではなくオーストリア＝ハンガリー帝国という大きい枠のなかで自治を獲得することでした。スロベニア民族は100万にも達しない数で、しかも分散居住しており、他のチェコ人、ポーランドなどとは比べようもなく抵抗勢力としては小さく、民族の要望を受け付けては貰えません。それでも、二重帝国となったオーストリア側の地域では、民族平等の建前で民族言語の公用化は無理でしたが、公用文、地名表示にバイリンガル表示がされるようになったのです。（参照：日付印、官葉の表面バイリンガル表示がある）

## 「未回収のイタリア」

イタリアでは統一国家が形成されずに中世以来小国に分裂の状態がつづいていました。各都市国家はオーストリア、スペイン、フランスの思惑で権力争いの場にはありましたが、ナポレオン戦争後の19世紀、イタリア統一運動が活発になって来ました。1848年以降、イタリア各地で独立・統一運動が盛り上がるのですが、オーストリアとフランスの干渉で、すべての運動が失敗していました。た。サルディニア王国を核として統一運動が進み、フランスに近づき、1859年フランス・サルディニア連合軍でロンバルディアに攻め入り、オーストリア軍を破り、サルディニア王

国に併合します。次に 1866 年普墺戦争の際プロイセン側で参戦し、ベネチアを獲得し編入します。1870 年ローマ教皇領も編入しイタリア王国として統一は一応完成します。しかし、ベネチア編入以後もオーストリアとの領土問題は残り、「未回収のイタリア」と呼ばれ、オーストリア領の返還を要求し続け、第一次大戦まで持ち越されます。

1848 年ベネチア港でイタリア船員の反乱でハプスブルク帝国はベネチア港にある船を抑えられたので軍港、貿易港をトリエステとプーラに移しました。しかし、この時代「国際貿易」が大いに発展に向いました。

トリエステ港を利用する北ヨーロッパ貿易が拡大、トルコやバルカン貿易の拡大、1869 年のスエズ運河開通でアジア貿易が開かれ、世界貿易も拡大します。帝国初の主要幹線鉄道、ウィーン＝トリエステ間のオーストリア南部鉄道が 1857 年に完成し、貿易のための帝国の各地より価値ある資産そして銀、岩塩、チェコのボヘミアガラス、ポーランドの穀物、ハンガリーのワインなどがトリエステから輸出され、船舶用の石炭もトリエステ港より供給されます。地中海貿易、トルコなどを含む中東貿易に加え、インド、中国へと航路が拡大していきました。

貿易港・造船中心地としての役割は 1836 年にロイト (Oesterreichischer Lloyd) が設立され、1913 年にはロイトは 62 船舶からなる大船団を所有していました。

## 「第一次大戦期」

### 勃発の遠因

セルビア王国はオーストリア＝ハンガリー二重帝国によるボスニア・ヘルツゴビナの併合、アルバニアへ独立の支援で海への出口の希望を打ち砕かれ、反発していました。二国間の関係が緊張化する中発生したのが皇位継承者フランツ・フェルディナンド大公とその夫人が暗殺されたサラエボ事件です。

第一次大戦が始まった頃、スロベニア人はハプスブルク帝国に忠実で、徴兵は問題なく受

け入れられ、スロベニア兵士は、セルビア戦線、東部戦線とあらゆる戦線で戦いました。スロベニア人にとって帝国から独立でもなく、倒すのが目的ではありませんでした。帝国内での自治であり、分散している民族の統合でした。しかし、協商国側に立ったイタリアは参戦の条件は英仏との密約で「未回収のイタリア」領をイタリアに渡すというものでした。イタリアとオーストリアの戦端はイタリアとの国境にて開かれます。イソンゾ川を挟んで攻防が繰り返されました。そこはスロベニア人の居住地域であり、スロベニア軍団、義勇兵など国土防衛に立ち上がりました。

戦後ダルマチア、イストリア、隣接するスロベニア人地域を要求、イソンゾ川の右流域からアドリア海沿岸部を占領され、スロベニア人居住地域は分断されてしまいます。(地図参照)

オーストリア帝国側で敗戦を迎えたスロベニア、クロアチアは国土防衛のため「スロベニア人・クロアチア人・セルビア人の国」を作りましたが、戦勝国イタリアがその領土を英仏の秘密協定によって約束されたものとして狙っており、イタリア軍に対抗する武力がありませんので、父母の地を防衛のためセルビア王国と併合しなくてはなりませんでした。(セルビア王国は大戦前に独立しており、戦後は戦勝国側にいた)

戦勝国の思惑で強引に線引きされた世界で「セルビア・クロアチア・スロベニア王国」が成立し、スロベニアは民族を同一地域に統合をできましたが、隣接のイタリア、オーストリアに同朋を少数民族として残すこととなりました。

「セルビア・クロアチア・スロベニア」王国は歴史、宗教、文化を異にしてきた多様な民族を抱え込んだ統一国家であり、セルビア人優位の中央集権でした。国土を守るためやむなく「セルビア・クロアチア・スロベニア」王国への合流を選択したクロアチア人と南スラブの盟主を任ずるセルビア人の確執は徐々

に顕著化し、建国後その後のユーゴスラビアの運命をも予感させるものでした。(二つの文字、三つの宗教 ) スロベニア人にとっても意に反した国家体制でした。しかし分断されていた民族を凡てではないものと同じ地域に統合でき、スロベニア語という民族言語の自由を得ました。

### 「第二次大戦期」

参照 レジメ付表4 4-1、4-2、4-3

第一次大戦後スロベニアが所属していたオーストリア帝国は崩壊し、諸民族が独立し領土が大きく減じ自立さえ危ぶまれる小国になっていました。生存するためにドイツとの併合を望みましたが、仏伊など戦勝国は大ドイツの出現を恐れ、一つになることを禁じました。1920年代初期すぎましいインフレに襲われるのはご承知の通りです。スロベニア人にとっては、セルビア人主導の政治体制化にあって、同胞の同地域に居住と自治、民族言語の使用が自由になったことが救いだったのでしょう。ナチスドイツが台頭すると、バルカンの地は騒乱の地となっていきます。ポーランド、フランスを撃破したドイツは次の照準をソ連に定めており、それにはバルカン半島の安定が不可欠であった。ドイツが求めていたユーゴの三国同盟参加は国内のセルビア人の怒りを噴出させ、無血軍事クーデターが発生。三国同盟は白紙に戻りました。ヒトラーは直ちに報復に移り、ユーゴへ侵攻が開始されます。

1941年4月6日ドイツ陸軍はブルガリアの国境からセルビアに侵攻、二日後にはスロベニアとオーストリアの国境を越え、マリボル、ツェリエなどの北スロベニアを占領します。併合後郵便はドイツ帝国郵便に吸収され、ドイツ本国切手のみが使用されます。

イタリア軍は南西方面から侵攻し、4月11日にはリュブリアナを含むサバ川以南を占領した。当初1920年代激しい同化政策が取られていたベネチア州に併合しようとしたが、イタリア政府はイタリア王国の一地方リュブ

リアナ州として併合しました。

4月6日ドイツ空軍のベオグラード爆撃が開始され、12日にベオグラード陥落、17日にはユーゴ軍が降伏しました。ドイツはユーゴスラビアを分割し、占領ないし傀儡国家に統治を任せました。

セルビア地域はドイツ軍占領下に置かれ、ユーゴ王国政府はロンドンに亡命します。

クロアチア地域では枢軸国が侵攻するとナチスに康応して4月10日クロアチア独立国の創設がザグレブで宣言されます。ダルマチア海岸部をイタリアに施政下に譲ることでボスニア・ヘルツェゴビナ併合し、古代クロアチアの版図を再現することになりました。クロアチア領内ではセルビ人に対し厳しい人種政策が実行された。この兄弟殺しが1990年代ユーゴスラビアの内戦での惨劇の遠因になります。

ドイツ併合地ではドイツ化が強権下で進められ、公共の場でのスロベニア語の使用禁止、スロベニア語地名は廃され、凡ての公用文書はドイツ語のみで記述されます。学校、文化施設は閉鎖され、多くの住民がドイツ本国やクロアチアに強制移送された。

イタリア施政はドイツ占領に比べれば、急進的なイタリア化ではなく、文化的自治を認め、政治的、経済的にスロベニアを抱え込む政策を取りました。公文書などはイタリア語とスロベニア語併記を許可していました。当初地域の主導者は独伊占領軍に対する抵抗運動を抑えていましたが、ドイツ軍のソ連侵攻後は抵抗運動に転じます。

1943年9月イタリアの降伏と戦線離脱はバルカン半島に軍事空白を生じ、ドイツの国防に危機をもたらしました。ドイツ軍はイタリア軍に代わって南スロベニア(リュブリアナ県)を占領下に起きます。(軍事占領下のリュブリアナ県ではイタリア通貨とイタリアの占領システムを継続)

ドイツ軍はローマを含む中部・北部イタリ

アを軍事占領し、ムツソリーニを救出して1943年9月15日イタリアのサロにイタリア社会共和国を成立させた。大戦終了の直前まで政権は維持されていたが、実態はドイツの傀儡政府であった。

ドイツ軍は再占領したアドリア海沿岸のイタリア領の Fiume、Pola、Trieste と Laibach、Udene にドイツ郵便局を設置、ドイツ公用郵便なるシステムを敷いた。占領行政の公文書、ナチス機関の文書、軍事郵便を送受した。ドイツ人は制限があるものの民間郵便としても利用できた。

ドイツ軍はアドリア海の港湾都市ザーラ (Zara)、コトル (Kotor) など旧イタリア軍の軍事的要所に侵攻し、駐留イタリア軍を武装解除させ軍事占領する。ブルガリア、ギリシャと延びきった戦線補給路の確保の意味もありました。ユーゴスラビア領内はチトーが指揮するパルチザンとドイツ軍パルチザン掃討部隊の暗闘が大戦終了間近まで続いていました。

### 「ヨーロッパ戦線終了」

1945年5月9日、スロベニアでドイツ軍の戦闘が停止、第二次大戦ヨーロッパ戦線は終結。チトーパルチザンは第一次大戦後イタリア領となっていたスロベニア人居住地域 (イタリア領トリエステ、ゴリチアなどベネチア・ジュリア地域) の要所を英米軍より先に抑えていましたが、戦後この地域をめぐるイタリアと国境紛争を生じて、これより長い戦後処理が始まります。

スロベニアは大戦中ドイツ、イタリア、ハンガリーに国土を占領され、ドイツ切手、イタリア切手、ハンガリー切手が使用された。解放後、占領時代の各国の切手に解放記念加刷し、短期間発行した。スロベニアでドイツ語地名を削った日付印が使用され1947年頃まで継続使用。

パルチザンとはユーゴスラビアにおける枢軸国の支配に抵抗したユーゴ共産党率いる人民

解放戦線の軍で、意思決定はチトーを指導者とするユーゴ人民解放反ファシスト会議 (AVNOJ) です。1941年の蜂起から大戦末にはパルチザン兵士は80万人を数え、人民解放軍と呼ばれました。

大戦中の1943年、チトーは解放区のヤイツェでユーゴスラビア民主連邦の樹立を宣言しました。戦後ユーゴスラビアは多民族国家を自覚し、連邦国家に再編成する方針と王国制の廃止などが確認されます。スロベニアは社会主義国家となるユーゴスラビアの一共和国として再出発することになります。

「国境紛争」 (地域略図参照 レジメ付図5) 1945年5月チトーパルチザン部隊は連合軍に先駆けてトリエステに侵攻、ベネチア・ジュリアの大半を占領していた。チトーパルチザンは英米ソの取り決めで部隊は6月9日トリエステより撤退するが、スロベニア人部隊はピランと周辺を占領、連合軍の管理下にあるも帰属は不透明であった。トリエステ湾沿岸部はイタリア人が多く居住、イゾラ地域は紛争の地でした。

1946年3月にチャーチルの演説で「バルト海のシュテッティンからアドリア海のトリエステまで、鉄のカーテンが降ろされている」と、この都市の名が言及されました。重要な港湾都市トリエステの帰属問題は戦後の国際関係の焦点の一つとなり、トリエステは東西冷戦の前線となりました。

1947年2月、パリ条約でユーゴスラビアは占領地域の大部分を領土と認められました。トリエステとその周辺地域は帰属が棚上げし、トリエステ自由地域として国連管理下に置かれる。トリエステ市街地を含む北部 Zone A は英米連合軍、南部 Zone B はユーゴ軍の勢力下とされました。

チトーはスロベニアが海に面していないので、戦後経済復活のために、インフラが整ったトリエステが欲しかったのですが、戦後処理を連合軍と交渉する過程で、トリエステをイタリアに渡す代償にゴリチアの半分を得る

道を選択し、施政下にあるカポディストリア（コペル）を代替りの貿易港にすべく建設を進めました。

それでもチトーは完全にはトリエステを諦めていず、自由地域の境界でしばしば紛争を起こしました。イタリアは、トリエステ湾沿岸部はベネチア時代からの固有領と固執し、紛争の收拾は容易ではありませんでした。

1954年10月、英、米、イタリア、ユーゴスラビアがトリエステ帰属をめぐる紛争解決協定に調印。ゾーンAはイタリアに返還された。南部のゾーンBはユーゴスラビア領に組み込まれる。国境問題と少数民族の地位問題は1975年のオージモ条約で明確に表示されました。トリエステ自由地域の解消です。

「おわりに」

私のスロベニアの収集は、スロベニアの歴史を郵便史という形で表現を試みています。1980年代末から1990年代、ベルリンの壁崩壊、ドイツ再統一とそれに続く東欧の体制の崩壊があり、歴史のターニングポイントで、郵趣界は世紀の証言としての郵趣マテリアルの収集で賑わっていました。

私もドイツ、東欧の歴史的な（紛争地）カバー集めに夢中になったものです。歴史を探っていくとハプスブルク帝国下で長いゲルマン民族との接点のあるスロベニアに私が興味を持ったのは当然の成り行きでした。収集の上での問題は第一次以後のイタリアの占領・併合地の郵便、スロベニア地方切手チェーンブレイカーのカバーの入手が難しいのと歴史の複雑さでした。言語も理解の壁で、スロベニアはオーストリア、ドイツ、イタリアに関連しますからカバーの表裏に現われる言語はドイツ語、イタリア語に加えてスロベニア語、クロアチア・セルビア語などです。収集した郵趣品を整理し作品に仕上げるのは楽しいものです。いかにして運ばれたか郵便料金はどうか、消印、到着印、検閲どこでその目的は、その歴史背景は？ 未だに分からないことだらけです。謎解きの面白さがあり、それゆえ

解明できた時の嬉しさは格別です。

# レジュメ付表ー1 スロベニアとは



図 1-1 現在のスロベニア周辺地図 (1991)



図 1-2 ハプスブルク帝国時代のスロベニア

## レジメ付表2 イリュリア諸州



### 「ナポレオン統治のイリュリア諸州」

1809-13

ヴァグラムの戦いで敗北していたオーストリア帝国が、1809年のシェーンブルン条約でケルンテン、クライン、サヴァ川南西のクロアチア、ゴリツィア及びグラディスカ、トリエステをフランスへ割譲したことで成立しました。これらの領土はアドリア海の北から東にかけて続き、ダルマチアと連合してイリュリア州となっています。事実上フランスの一部であり、州都はリュブリャナ（スロベニア）です。

ナポレオンが何故イリュリア州を作ったか。制海権を持つイギリスに対抗して、この時期大陸封鎖をしています。イリュリア州にて、アドリア海を直接フランス統制下に置くことは大陸封鎖を強化することでした。地中海を通じて、イギリスとの密貿易を防ぎ、オーストリア帝国がイギリスとの接触を絶たせ、フランスに好意的な味方させる戦略がありました。

18世紀末にはベネチア共和国はナポレオンに倒され、イタリア半島の殆どはフランス領かになりました。

この「イリュリア」という長い間、忘れられていた古代名はナポレオンによって復活しました。イリュリアとは何か？について補足してみましょう。

バルカンには三つの先住民がいました。紀元前トラキア人、ダキア人、イリュリア人です。バルカンを南北に分けてドナウ川の南にトラキア人、北にダキア人、アドリア海沿いにイリュリア人となります。現在のバルカンの主要民族は南スラブ系諸民族、ブルガリア人、アルバニア人、ルーマニア人です。アルバニア人はイリュリア人の子孫、またルーマニア人はダキア人の子孫で、南スラブ人とブルガリア人は元々バルカンの民でなく、南下して来たスラブ民族の末裔となります。

トラキア人はギリシャ人王国に滅ぼされ、トラキア王国は消滅、民族も後から来たスラブ人やルーマニア人に吸収され消滅したと思われるが、バルカン最古の住民と考えられています。

イリュリア人 発祥は紀元前1800年頃と言われる古い民族。アドリア海沿岸一帯に定住していました。紀元前3世紀に現在のアルバニアのシュコダラを都とする王国を造ったが紀元前168年にローマに征服され属州となる。その後ローマ帝国に帝国軍隊に精鋭をおくり、歴代のローマ皇帝もイリュリア人出身が少なからずいる。コンスタンティヌス、ユステキアヌスなど。

因みにブルガリア人 7世紀後半にモンゴル系の遊牧民族のブルガリア人が南ロシア方面から南下し、南スラブ民族を支配。しかし軍事は強力だが少数で文化的に劣勢なブルガリア人は後の2世紀の間にスラブの文化と言語を受け入れ、農耕のスラブ民族に同化され、名前だけ残すこととなったのです。

ローマがバルカンに進出、紀元前148年、弱体化していたマケドニア王国を滅ぼす  
ローマ、1世紀に勃興したダキア人の王国を101～106年戦い、ダキアを属州とします。  
ローマ、イリュリア王国を紀元前168年に征服し属州とします。

### レジュメ付表3 南スラブ民族



図3-1 第二次大戦後のユーゴスラビア



図3-2

#### スラブ民族の大移動

6～7世紀南スラブ人はバルカンに南下し、西部のアドリア海側に居住する。

1.スロベニア人はアドリア海の最も奥まったところでイストリア半島からアルプス東部に定住する。778年からフランク王国の支配を受け、カトリックを信仰。使用文字はラテン文字。

2.クロアチア人は7世紀バルカンに侵入、アドリア海沿いのダルマチアを中心に居住、924年独立の王国を樹立するが、1102年ハンガリーの支配を受ける。カトリックを信仰。使用文字はラテン文字。

3.セルビア人は7世紀にクロアチアよりさらに南方、ほぼ現在のセルビアの地に定住。族長の下に各部族が群雄割拠の状態あった。ギリシャ正教 使用文字はキリル文字。



図3-3

中世のセルビア王国 1335年十字軍によって一時姿を消したがビザンティン帝国が再建し、南方ではオスマントルコが勃興しバルカンを窺う

この時代は海に面していたが、近世になってからは面していない

レジュメ付表-4 第一次大戦以後のスロベニア地域の変遷



図4-1  
第一次大戦後の  
スロベニア人地域

敗戦によりオーストリア・ハンガリー二重帝国が解体され、領内の諸民族は独立に向う。スロベニアにおいても「スロベニア人・クロアチア人・セルビア人の国」を形成する。しかし、戦前の英仏の「未回収のイタリア」をイタリアに渡す密約でイタリア軍は夙伊の国境からスロベニア西部を含むゴリチア、イストリアを占領。1920年ラパロ条約で国境が確定される。

図4-2  
1941年ドイツ軍侵攻  
スロベニア

オーストリアを併合した1938年からドイツはスロベニアと国境を接している。1941年4月スロベニアに侵攻し上部地域を併合する。

ハンガリーはオーストリア帝国とアウスグライヒを結んだ時プレクムリエはハンガリー領となった経緯がある。



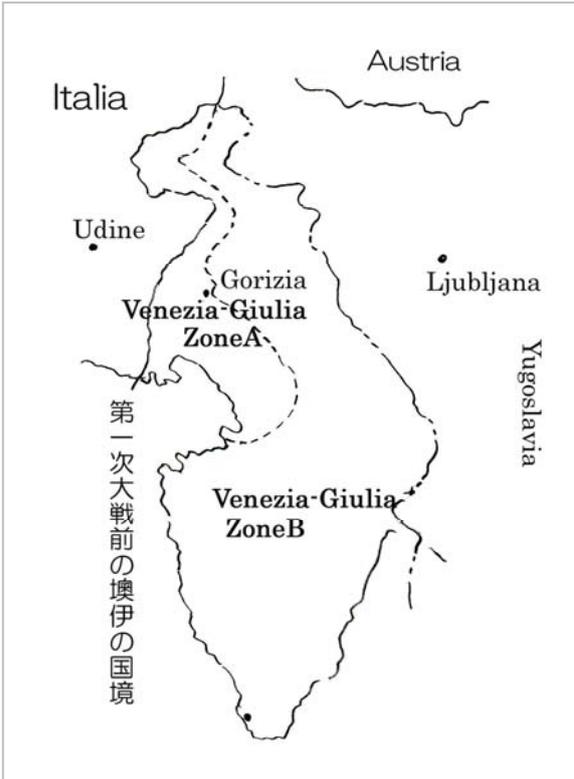
図4-3  
1943年9月イタリア  
降伏後

イタリアで政変が起き、ムッソリーニが逮捕され、イタリアは連合軍に降伏。ドイツ軍はこのことを予想し、直ちにイタリアとその支配地域の要所を占領下に置く。

スロベニア人地域はドイツ軍の支配を受ける。



レジュメ付表5 国境紛争（トリエステの領有争い）

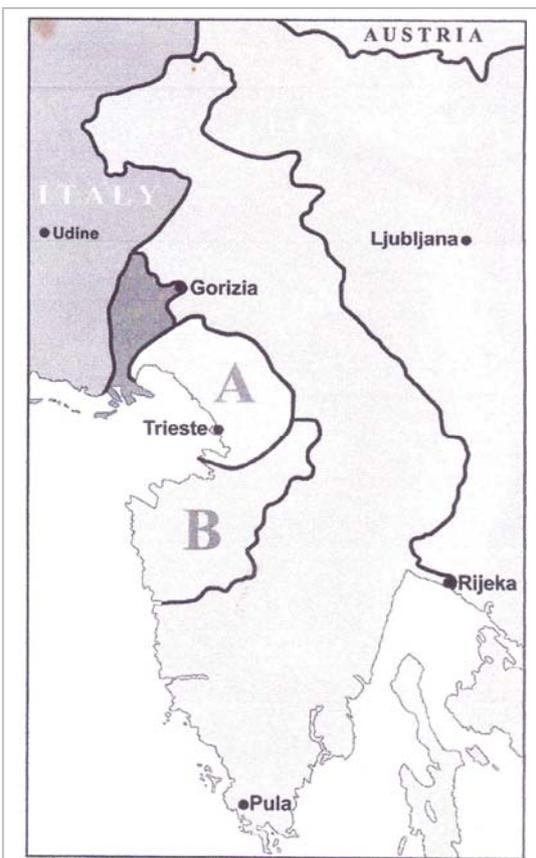


イタリア軍の連合軍への降伏後トリエステはドイツ軍の占領下にありました。ドイツ軍降伏の直前の1945年5月1日、チトー率いるユーゴスラビア・パルチザン軍（主にスロベニア軍団）が殺到し、翌日には連合軍（ニュージーランド軍）が到着しました。先に侵攻したユーゴスラビア軍は市内を42日間占拠、支配しましたが、連合軍とソ連の外圧により、最終的に6月12日に市内を撤退しました。

チトーパルチザン部隊はトリエステを含むベネチア・ジュリアの大半を占領、この地域をめぐるイタリアとユーゴスラビアで係争になり、1945年6月に暫定的に引かれた「モーガン線」を境界として、帰属を棚上げとし米英連合軍占領A地区とユーゴスラビア軍占領B地区に分けました。

1947年2月パリ条約で、ユーゴスラビアはその占領地域の大部分を領土と認められます。

(図 5-1)



トリエステ地域をどうするかについて、米英とソ連の間でその帰属は揉めました。当時ユーゴスラビアはソ連陣営と見られていたため、重要港であるトリエステを東側に譲ることは英米にとって取れない選択でした。イタリアとユーゴスラビアの民族対立よりも、資本主義陣営と社会主義陣営の対立で、東西冷戦の最前線になりました。

1947年2月、トリエステとその周辺地域の領土問題は棚上げされ、「トリエステ自由地域」として国際連合管理下に置かれました。トリエステ港を含む北部をゾーンAは英米軍、カポディストリア、ピランを含む南部海岸地域（ゾーンB）はユーゴ軍の統治下とされました。トリエステ自由地域の双方で通貨と切手を独自に発行しました。

**AMG-FTT**  
Allied Military Government-Free Territory Trieste

**STTVUJA**  
Free Territory Trieste - Yugoslav Army Military Administration

(図 5-2)